北海道医報
ISSN 0913-0217　2024.2.1. 第1265号
発行人　北海道医師会長　松家　治道
編集人　情報広報部長　橋本　洋一
発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011)231-1432　FAX(011)221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 275円(税込)

超高齢社会がやって来た
―自ら最期を決められるか―

情報広報部　山科　賢児

「75歳以上の高齢者を対象に、国の支援のもとで死を選ぶ権利を認め支援する制度が、国会で可決され施行された。様々な物議を醸していたが、超高齢社会の問題の解決の糸口として期待される。前例のないこの試みは世界から注目を集め、世間からも受け入れられるようになった」この衝撃的な内容を日本の近未来を舞台にして、どのように「生と死」と向かい合うかを問う『PLAN75』が、2022年6月上映された。

100年前の1923年当時の日本人の平均寿命は男性が42歳、女性が43歳であった。2021年現在の平均寿命は男性が81歳、女性が88歳となり日本人の寿命は約2倍となった。人間の長い歴史のなかで、これほどの「超高齢社会」は経験がない。長生きが幸せだった時代は終わり、長生きが大変な時代となった。今、これまで禁句とされてきた「自ら死に方を決める」という課題に直面している。

日本は世界で最も高齢化が進んだ国であり、来年2025年には団塊の世代が75歳以上の後期高齢者になり、国民の4人に1人が75歳以上となる。一方、社会保障の担い手である労働人口は減っており、高齢者人口の増加で社会保障費の増加と財源の不足が起こる。2025年問題を目前にして医療と介護分野の充実は覚束なく、少子化対策も手遅れ状態である。

日本における寝たきりの高齢者の数は、推定で300万人以上とされている。これほど寝たきり老人のいる国は世界中どこにもない。欧米は自力で生活できなくなった人に過度な延命治療はしないので、日本のように何年も医療機関でベッドに寝たきりになっている老人はいないらしい。日本では、「少しでも長く生きること」が善しとされてきたため、医療機関では点滴や胃瘻などの延命治療が行われなければならないこともあり、本人の意思に沿わないケースが多く存在しているのが日本の現状である。

日本人は、死を間近に見て考えることが少なくなったせいか、死を恐れて向き合うのを避ける傾向にある。死に直面すると「少しでも生きていてほしい」という思いが強くなる結果、家族は延命治療を選択する。「食べられなくなったら死が近づいている」という死生観がないのが日本に寝たきりが多いのと関係しているかもしれない。

日本の医療制度は出来高制の経済であり、医療行為をすることによって現場の経済活動が維持されている。また寝たきり老人の年金が家族の生活の糧の助けになっている場合があり、日本社会の不幸な現実が医療の姿を歪め、延命治療の拒否を難しくし、寝たきり老人を増やしている可能性がある。「自然に死ぬ」ことを希望するなら、やはり延命措置を拒否するリビングウイルを書くことだが、現在のところ人々の理解と認知が高いとはいえない。

「生か死か」の意思表示ができない寝たきり老人が医療機関で入院している一方、健康そうな高齢者も心に「生きる」問題を抱えている。「今までできていたことができなくなった。日々衰えを感じて生きているが自分ではどうすることもできない。いつ病気となり入院するかもしれない、しかし寝たきりにはなりたくない」そんな悩みを抱えて、「生きたくないけれど死ぬこともできず」誰にも迷惑をかけずに苦しまず死にたいと望む高齢者にとって、ゴールが見えない人生をひとり歩み続けるのは寂しく辛い。ひとり暮らしの高齢者の数は男女共に増加傾向にあり、令和2年には男性約231万人、女性約441万人となっている。

「PLAN75」の主人公は、夫と死別してひとりで慎ましく暮らす78歳。ある日、高齢を理由にホテルの客室清掃の仕事を突然解雇される。住む場所を失いそうになり、「生きたくても生きていけない」彼女は、ついに「75歳以上の方ならどなたでも無料でご利用できます。あなたの最期をお手伝い〈PLAN75〉」を申し込む。

国の用意する医療施設で致死量の薬品を投与されて安楽死が行われるはずが、器械のトラブルと隣のベッドで安楽死した男性の死の姿を見て、発作的に今までの決意を翻し、安楽死の施設から無我夢中で逃げ出す。歩き疲れやっとたどり着いた坂の上で、夕焼けを見ながら呟くような小声で「リンゴの木の下で明日また会いましょう。黄昏、赤い夕陽。西に沈む頃に楽しく頬寄せて恋をささやきましょう。真紅に燃える想い、リンゴの実のように」と歌う場面で物語は終わる。「死なずに生きていく」選択は、今まで以上に苦しく孤独な人生が待ち構えていることを意味する。それでも茨の道を生きると自ら決めた彼女の後姿からは、決して後悔しない信念が伝わってくる。

どうにもならない焦りと解決できない将来への不安と、心細さを抱えた独りぼっちの生活を描く「PLAN75」は、まるで今の日本の現実の姿を描いている印象を与える。超高齢社会の今、死を意識せざるを得ないからこそ「自らどう生きるか」を考えずにはいられない。